

《論 文》

小説『紅樓夢』にみえる鳥についての考察

池間 里代子

A study of the birds that can be seen in the novel “Hongloumeng”

RIYOKO IKEMA

キーワード

実の鳥 (real birds), 風箏 (kite), 食物としての鳥 (birds for food), 虚の鳥 (imaginal birds)

はじめに

本稿は先に発表した『花札の図像学的考察』¹⁾の中の「花と鳥の組み合わせ」より発想し、中国章回小説『紅樓夢』の中で鳥がどのように表われ、どのような働きをしているかを調べたものである。テキストを『紅樓夢』にした理由は、別の研究で該書を読んでいた際に鳥が比較的多く出現することに気づいたからだ。そこで鳥についての先行研究を調査したところ、第36回の芸を仕込まれた小鳥の話²⁾・第91回の禅問答に出てくる「鷓鴣舞」について³⁾・鳥の羽ばたきに関する擬音語⁴⁾・料理について⁵⁾しか見当たらなかった。本稿では『紅樓夢』全体を概観し、1. 実の鳥 (実際に生きている鳥、の意味である)、2. 人工の鳥「風箏」、3. 食物としての鳥、4. 虚の鳥 (鳥という言葉は使っているが、実際には生きていない鳥、の意味である)の4章を設け、それぞれについて本文中の記述を挙げつつ考察していく。

・鳥について

古来、鳥は空を飛ぶことから天や神の使いとして神聖視されることがあった。とりわけ、原始太陽信仰においては神そのものとあがめられることが同時多発的に存在する。

例えば、インドのガルダ・西欧のフェニックス・北アメリカのサンダーバードなどが挙げられる。⁶⁾

中国では西王母の使いとして三足鳥が創造され⁷⁾、日本に伝わって八咫鳥⁸⁾となった。三足鳥は太陽の黒点を象徴しているという。三は陽数であり、「万物」をイメージすることから採用された数であろう。⁹⁾

また中国古代、鳳凰という想像上の鳥が考え出された。『爾雅』によれば「嘴は鷄、頰は燕、頸は蛇、背は亀、尾は魚で、色は黒・白・赤・青・黄の五色で、高さは6尺ほど」とされる。この鳥は靈泉を飲み、竹の実を食物とし、梧桐の木にししか止まらないという。¹⁰⁾特に殷においては「鳳」と「風」とは同義であり、そのはばたきから風を起こす靈鳥として信仰された。後に五行説の流行により朱雀と鳳とが共に火を象徴し、同一視されるようになった。¹¹⁾

このように瑞鳥である鳳を筆頭に、朱雀・青鸞 (青濁とも。人面で八枚羽根と一本足)・喜鵲 (七夕に橋を作る) のような想像上の鳥を始め、孔子の高弟である公冶長が鳥語を解した話しなど、中国の伝説には鳥をモチーフにしたものが多い。一方、文学作品では『詩経』の「關關雎鳩」「雞雞喈喈」「交交黃鳥」を嚆矢に、王維が『聽百舌鳥』詩でその鳴き声を「入春解作千般語」と描写したとか、李白が『宣城見杜鵑

花』詩でホトトギスが「一叫一回腸一斷」と鳴くと言ったとか、枚挙に暇がない。¹²⁾ 文様では鶴・鶏・鴛鴦などが多く使われたことも言を俟たない。¹³⁾

・小説『紅樓夢』について

小説『紅樓夢』は清代（18世紀中葉）に書かれた章回小説である¹⁴⁾。作者は曹霑¹⁵⁾、前80回を曹霑が、後40回を高鶚（蘭墅）が書いたと言われるが不明である。曹霑は少年時代富貴な家に育ったものの、権力闘争に巻き込まれる形で家財没収され、南京から北京に戻され、極貧の中絵を売りながら生活した。『紅樓夢』の原型は『金瓶梅』のような作風だったと言われる。その後評者¹⁶⁾の導きにより数回リライトされ、完成に向かって最中に曹霑が亡くなってしまった。

小説は「自伝的」とも「古典的リアリズム」¹⁷⁾とも言われる。舞台は天上界「太虚幻境」と、それを反映した「賈府」である。生まれる際に口に玉を含んでいた賈宝玉（その石は太虚幻境にいた石であった）が成長して少年となった。祖母は大変可愛がるが、彼の性格は一風変わっていた。一種の「少女崇拜」ともいうべきもので、封建的な考えが大嫌いである。彼の周囲にはいつも親戚や女中などの女の子がおり、詩を詠み茶を飲み楽しく暮らしている。その中で従妹である林黛玉とは知音ともいうべき間柄であった。また一方、従姉の薛宝釵とは、彼女の持つ金の首飾りに刻まれた文字と宝玉の持つ玉に刻まれた文字とが対句になっていたことから「金玉縁」と言われ、婚姻を暗示していた。そんな中、黛玉が「涙を流しつくして」太虚幻境へ帰っていくが、それを知らされずに宝玉は宝釵と祝言を挙げる。やがて賈家は家財没収という家難に遭遇した。一切を悟った宝玉は科挙を受験して合格するも、出家して俗縁を断ち切る。劫が果て、太虚幻境には「金陵十二釵」に記載された人たちが帰ってくる。

『紅樓夢』は刊行される前から評判を呼び、手稿が市場に出ると高価で売れたという。¹⁸⁾ 後

に刊行され、続作が後を絶たなかった。

しかし当初は「誨淫の書」とか、満州族支配を否定する「風刺の書」と言われ、しばしば禁書リストに載った。それにもかかわらず貴族から下々までこの小説を愛読した。男は女性登場人物のファンになり、少女は作品世界に憧れ「紅迷」ともいうべき様相を呈した。また、小説に出てくる印譜・酒令・骨牌譜・双六なども発売された。¹⁹⁾

中華民国に入ってから本格的研究が始まり、蔡元培・胡適・俞平伯などが盛んに論文を発表し、そのうちモデル詮索をする一派が「紅学」と呼ばれた。

『紅樓夢』は『西遊記』『水滸伝』『金瓶梅』に続く「四大奇書」にも入った。²⁰⁾ 現代では各国語に翻訳され、世界中で読まれている。

本稿で使用したテキストは注14にあるように、『紅樓夢』上下、人民文学出版社、1982年3月翻訳は『紅樓夢』上中下、伊藤漱平、平凡社、1973年5月、である。

なお、本文には翻訳を用い、原文は章ごとに「注の後」で示す。

（ただし、第3章 食物としての鳥 に関しては料理名を本文中に示した。）

1. 実の鳥

1-1. 大観園の飼鳥

① 点景

ここでは、大観園内で飼われている鳥を取り上げる。物語の冒頭、林黛玉が初めて賈家に入った際に見えた籠の鳥たちは、富貴の象徴であると同時に、母親を亡くして母の実家である賈家で養育されるようになった林黛玉の境遇を暗示している。

また大観園造営の際、各所に配された鳥。それらの鳥には小鳥や水鳥、さらには鶴まで一通り揃っている。これらは小説にを彩りを与えたりサウンドスケープ（音風景）²¹⁾のためだけに

はなく、場面の転換や登場人物の心象を吐露する役割を持っている。

第3回 ここには鸚鵡・ほおじろなどとりどりの小鳥の籠がつるしてあります

第14回 鶏のときを告げる声まで聞こえだした

第17・18回 もっぱら鵝鳥・家鴨・鶏のたぐい
を買い入れる所存

第17・18回 鳥類などの買い入れ係は、鶴や孔雀をはじめとして、鹿・兎・鶏・鵝鳥のたぐいの

第25回 みんなしてとりまくように画眉の水浴びをさせています

第26回 松の木のもとで鶴が二羽、羽づくろい
をしています

第26回 ずらり懸けならべたとりどりの籠には、さまざまの珍しい小鳥の姿ものぞかれます

第26回 廻り廊下のところでしばらく小鳥とたわむれ

第26回 そこにはとりどりの水鳥が池で水浴び
をしており

第27回 向こうの方で鶴の舞うところを見物
していましたが

第30回 あひる・大おしどり・五色おしどりだ
の何羽かを

第60回 手にした糰子をつつまた一つと引きち
ぎって、小鳥に投げてやっはたわむれ

第76回 なんと飛び立ったは一羽の白鶴、その
まま

第3回「ほおじろ」と訳されているが、(原文「畫眉」)正しくはガビチョウ(画眉鳥)のこと。体長22~25cmで目のまわりに白く刷いたような模様があるのでこの名がある。『長物志』によると歐陽修の詩に「畫眉鳥」があり、北宋ですでに飼鳥として存在した。²²⁾ 現在北京では「遼鳥」といって鳥かごを持って散歩をし、公園で愛好者同士がガビチョウなどを見せ合う風習があり、それは清代からあるという。賈府でもこの鳥を飼っていることから、その鳴

き声を楽しんだのだろう。

第26回に鶴がみえる。鶴は唐の白居易と周辺の人々に愛好された故事や、北宋の隠逸詩人林逋の「梅妻鶴友」より文人趣味の一つとして広がった。大観園という巨大な庭園に鶴を(おそらく放し飼いにして)飼うということは、風流なふるまいであると同時に財力の大きさを誇示するものであり、富めるものの奢りがみえる。

第60回「手にした糰子を…小鳥に投げてやっはたわむれ」は子供芝居役者である芳官が、趙氏(主人公賈宝玉の父の第2夫人)といさかいをしたあと、蟬姐兒(賈府の使用人)にからみ、蟬姐兒が買ってきた糰子(蒸し菓子)を小鳥に与える場面である。賈府で子供芝居一座を所有していることが富貴の描写であるが、それにも増して芳官や蟬姐兒などという本筋から見れば端役すぎない者にも感情があることを作者は見逃さない。身分の上下に関係なく喜怒哀楽があるのだ、という視点が過去の小説と異なっている。ここでは芳官が身分から言えば主筋の趙氏と喧嘩をやらかし、くさくさした気分のところ以前から含みのある蟬姐兒の糰子が登場したことから、その持って行き場のない感情が「糰子を小鳥にくれてやる」という行動になったのだ。

② 小紅と小鳥の餌やり

第27回 「あんた、ぜんたい気でもふれたの。

中庭のお花に水もやらねば、小鳥に餌もやらぬ。……」「……わたくしが小鳥に餌をやりましたころといえば、お姉さまはまだ休んでいらっしやいましたわね。」

ここに登場するのは小紅(本名は林紅玉)という宝玉付きの下女である。同じく宝玉付きの晴雯(目上の女中)と言いあっている場面で、彼女の仕事が花の水やり・鳥の給餌・風炉焚きであることが分かる。この小紅は口のきき方がハキハキしていて使えるということで、このシーンでは王熙鳳(主人公賈宝玉の従兄の嫁、賈府の家事を取り仕切っている)の使いをして

いる最中である。そういったこともあるのか、晴雯の突っ込みにも臆せず堂々と反論する。このような荒仕事をしている女中の上昇志向や気の強さといった性格が、「鳥に餌をやったか」という会話の中で生き生きと描写されている。

なお、このあと小紅は念願かなって王熙鳳付き女中としてランクアップするのである。(さらに、主筋の若君 賈芸と結ばれ、後に賈宝玉が投獄された際に救出するという伏線あり)

③ 劉ばあさん

第41回 小鳥までがお上品でございますな。こんな小鳥でもお屋敷に上がったとたん、器量よしにはなる、ものもしゃべれるようになりますものなあ。…あの廊下の金の止まり木に止まっておりました毛が緑で嘴の赤いのは鸚哥でございます。…なれどもあの籠のなかの黒い鴉、ありゃまたなぜ鶏冠が生えて、ものがしゃべれたりいたしますので？

劉ばあさんとは、小説の中で一種道化回しの役をする人物である。元々賈府とは付き合いのある農家の老婆であるが、暮らし向きが傾いたために援助を願い出た。(第6回)その後再訪した際、大観園で重陽の宴を張るといので食事に呼ばれた。賈母(主人公賈宝玉の祖母で賈府最高権力者)が劉ばあさんを気に入り、楽しく食後の散策をしていると、田舎暮らしで物を知らない劉ばあさんが上記の質問したのである。

この場面は、鸚哥は知っているが「八哥兒(九官鳥)」を知らなかった庶民の無知を、劉ばあさんの口から語らせている。食べていくのにカツカツである劉ばあさんと、ベットとして大事に飼われている九官鳥とのコントラスト、そして九官鳥の存在を知らない劉ばあさんを「一同、これを聞いて、またまた大笑いするのでした」と笑い飛ばす賈府の面々。富貴の絶頂にある賈府の奢りを余すところなく描いているシーンである。無論、以前の小説では富貴—貧困の

描写は避けられていたのであり、ここでは富貴を描くことで貧困を際立たせる働きをしている。

なお、舌で人語をまねる鸚哥に対して九官鳥は鳴管から発音するのでより人語が上手いという。

④ 黛玉

『長物志』には「(鸚鵡などは)市井の言葉を覚えさせるな」とある²³⁾が、林黛玉の部屋で飼われた鸚哥は女主人の口真似をする。黛玉が日々何かにつけて憂っているのは前世からの因縁であるが²⁴⁾、嘆き方が尋常通りではなく鸚哥までもが(覚えさせないのに)黛玉のため息を覚えてしまう、という嘆きの深さを表現している。

また、女中の言う「姫さまよ」とか「姫さまのお帰りよ」のような日常語をすっかり覚えこんでしまうとある。これは多少コミカルな感じがするが、第89回では宝玉の婚約が「金玉(……)縁」の暗示通りになり、薛宝釵が妻に決まったことを、偶然女中たちの雑談を立ち聞きして知ってしまったショックが鸚鵡の唐突な「お帰りよ」によって相乗効果を上げている。鸚鵡の言葉が(内緒の話しを主人にきかれました?)女中の不安と、(ついに聞いてしまった!)黛玉の衝撃を表わしている。この後黛玉は悲観して死を意識するのである。

第35回 いきなり回廊の鸚哥が黛玉のやってきたのを見つけて、クワッと一声鳴いたかと思うと、ひらり舞いおりました。……その鸚哥はまたもとの止まり木に飛び上がって、かん高く「雪雁、雪雁、早く簾あげて。姫さまよ」と叫びます。……「えさやお水はもうもらったの」それに応じて鸚哥はフウウッと一声長くため息をもらすのですが、そのさまというのがなんと黛玉が日ごろ悲嘆にくれているときの口跡をそのままとったかのよう。それにつづけて鸚哥の口ずさみましたが——そのわれの花

埋むるを痴と笑え いつの日かわれを葬る
 はそも誰ぞ……「いまのは、みな姫さまの
 日ごろ口ずさんでおいでの文句。それにし
 ても、よくまあ、覚えこんだものでござい
 ますこと」……黛玉はやるせない気分をま
 ぎらそうと、紗ばりの窓を隔てて鸚哥相手
 におもしろ半分にあざけてみたり、かと思
 うと、日ごろ自分の気に入っている詩句を
 教えこんでは暗誦させてみるのです。

第89回 鸚鵡が人間の口まねをして、「姫さま
 のお帰りよ。すぐお茶を注いできて！」と
 さげびました。これには……びっくりして
 跳び上がらなばかり。ところが振り向いて
 みても人の姿は見えませんが、さてはと
 鸚鵡を「こいつめ！」と叱りつけました。

また、鸚哥や鸚鵡は人語をまねることから
 「賢い」というメタファーを持つ。林黛玉が身
 近にこれらを置いていて、しかも彼女の口真似
 をすることは、元春（賈宝玉の実姉であり、宮
 中に入り貴妃となった）が才気あふれる彼女の
 詩を絶賛したことを想起する。

⑤ 齡官

子供芝居一座の齡官は賈薔（主筋の若者）が
 好きで、密かに釵で地面に「薔」字をいくつも
 書いていたところを賈宝玉に目撃されたほど
 だ。（第30回）その賈薔が憂鬱な齡官の慰め
 と買ってきた玉頂金豆（芸をする小鳥）を、
 齡官は無下に突っ返す。いわく「お宅では子供
 に芝居をさせるだけでなく、小鳥にも芸を仕
 込んで慰め物にするのですわ。」と。齡官とて
 相手が好意から手に入れたものを「小鳥にも
 芸を仕込んで慰め物にする」イコール「自分
 を河原者だと蔑んでいる」などと表層的に考
 えてはいない。ただ、自分の憂鬱は子供だま
 しの「芸をする小鳥」では癒されない。齡官
 の内心が分からない賈薔に対して怒ったの
 だ。

かくして賈薔のプレゼント作戦は、少しも
 効かなかっただけでなく逆効果になってしまっ

た。本来ならば封建時代にあつて主従関係
 があるので、賈薔は齡官を自分の妾にするこ
 とは造作もないことであろう。しかし、齡官
 に一個の人格を認めた作者の筆致は、旧社会
 にあつて「塵芥同然」の觀賞用役者に喜怒哀
 楽の表出を許し、対応に苦慮する若君との
 対比によって鮮やかに「屈折」を表現した。

第36回 その籠のなかには小さな舞台が組
 んであり、小鳥も一羽入っています。さもう
 れしようにして齡官の待つ奥へゆこうとし
 た賈薔は、……「その小鳥はなんという小
 鳥なの？」「こいつは玉頂金豆というので
 すよ。」……「あなたの気晴らし用にね、小
 鳥を買ったのだ。」……さっそく粟をつま
 み、その小鳥の機嫌をとりますと、……ひ
 とり齡官はフンと鼻の先で笑ったきり、ぶ
 んぷんしたていで、……「あなたまでこん
 ど小鳥を手に入れて、これにそんなことを
 させようとなさるのですからね。……」「
 あの小鳥だとて、人間といっしょにはならぬ
 にしても、巢には親鳥がおります。」

1-2. 若君と鳥

① 鷹狩り

第26回 せんだって狩りをしていて、鉄網山
 で鷹のやつに羽でうちはたかれた

第47回 せんだって何人かで鷹狩りに出かけた
 ときも

第26回にみえる鷹狩りは、馮紫英という貴族
 の若君が薛蟠（薛宝釵の兄）の誕生祝いの席
 上、顔の生傷を指摘されて答えたものである。
 これに続けて「3月の28日に出かけましてね、
 一昨日（薛蟠の誕生日は5月5日）にはもう舞
 いもどったのです」「父がゆくもので、こっ
 ちも仕方なくおつきあい。……あんなつらい
 お役目など買ってでられたものですか？」とある
 ことから、約一か月間山で鷹狩りをしたものと
 分かる。また原文「兔鶻」から兎などを獲るこ
 とが想像される。

第47回の話者は柳湘蓮（賈宝玉の友人）である。この人物は若君ではあるにはあるが、どちらかという遊び人という形象だ。それでも数名で鷹狩りに出かけたことが分かる。

日本では鷹狩りというとお殿様がするというイメージだが、『紅樓夢』では貴族の若君が父に従ったり、友人と連れ立ったりして狩りに行っていたらしい。清朝支配者である女真族は元来が狩猟民であったので、鷹狩りがこうして小説にも登場するのだろう。ただし、主人公の賈宝玉は鷹狩りに出かけていない。狩りをするのにまだ年齢が達していないか、作者にその体験が無かったか、あるいは賈母の溺愛によって狩りが禁止されていたか定かではないが。馮紫英が「あんなつらいお役目など……」とこぼしているように、鷹狩りは荒々しく、乳母日傘で育った若君にしてみると自ら進んで行こうというものではなかったかもしれない。ただ、伝聞という形でも鷹狩りを登場させたのは小説にリアリティを与えた。

② 闘鶏

第4回 終日ただ鶏を闘わせたり馬を駆けさせたり

第7回 犬をば盗む、鶏とはふざける

第9回 鶏を蹴合わせたり犬を駆けくらべさせたり

闘鶏は歴史が古く、『史記』『左伝』『戦国策』などに文字が見える。²⁵⁾ 娯楽として、賭けの対象として古くから好まれてきたようだ。ただし、闘鶏で使う鶏は飼育に相当手間を掛けなければならず、やはり富貴の象徴と言えよう。小説では第4回・7回・9回に闘鶏が出てくるが、いずれも若君が遊びですることである。ここでも賈宝玉は参加していない。鷹狩りと同様、闘鶏には年齢が若く仲間に入れなかったのか、あるいは風流さに欠けるため賈宝玉が気に入らなかったのか、微細な描写が得意な作者の筆も闘鶏に関しては鈍い。いずれにせよ、小説の中では若君たちの少々困った娯楽とみなされ

ているようだ。

1-3. 野鳥

① 雀・鳥

飼鳥に対して野鳥には「自由」という記号が備わっている。人間界とは無関係の、自然である。しかし、小説に登場する野鳥はしばしば人間と関わる形で登場する。

第24回 軒ばで雀を巢からとりだして遊んでいきます

第32回 あそこで雀が二羽喧嘩しておりまして

第51回 それが何とあの大錦鶏

第58回 急に一羽の小鳥が飛んできて、枝に止まるなり、しきりにさえずりはじめました

第82回 数知れぬ雀の鳴き声がしだして、「チッチ」「チュンチュン」としきりにさえずり

第91回 すると軒さきで鳥の「カアカア」鳴き立てる声かして

第24回ではせっかくの野鳥を賈宝玉の小者たちが「巢からとりだして遊んで」いる。もちろん巢にいる雀はまだ巢立ちをしていない子雀だろう。賈芸（主筋の若者。後に前出の小紅と結ばれる伏線あり）が「こりゃ、猿ども、いたずらしておるな。おれさまのご入来だ」といいつつ登場する。ややヒーロー気取りだが気は優しい、という性格を表わしている。なお、このシーンは後述の「老蚌懷珠（料理名）」と関連があることを指摘しておく。

第32回では襲人（賈宝玉付きの女中）が主人である賈宝玉にまつわる二人の少女、薛宝釵と林黛玉との事で思いにふけている時、突然薛宝釵に声をかけられて咄嗟に「あそこで雀が二羽喧嘩しておりまして」と答えるシーンである。言うまでもなく「二羽の雀」は薛宝釵と林黛玉を暗示している。つまり、ここでは実景ではなく心象だったのだ。

第51回の大錦鶏は月夜に築山から出てきて麝月（賈宝玉付きの女中）を驚かせた。この場面

は襲人が不在の夜に起こった晴雯と麝月のおどかしごっこである。賈宝玉に仕える女中の性格を細かく描写する、いわば小道具として大錦鶏が使われている。

第58回にみえる「一羽の小鳥が……しきりにさえずりはじめました」のくだりは、賈宝玉が花時を過ぎた杏を見つつ少女たちの将来をあれこれと付度していたときに耳にしたさえずりを、「あの小鳥はきっと杏の花の盛りの時分に来たことがあるのだ。それがいまあして花もなく、実と葉っぱしか残っていないものだから、ああもやたらに鳴きたてるのだらう。あの声は泣き悲しんでいるに相違ない。……来年また花の咲くころ、あの小鳥はそれまで覚えていて、ここへ飛んできて杏の花と再会することだろうか?」と、感傷にふける場面の描写である。杏の花を大観園に住む少女たちに、さえずる小鳥を自らにたとえている。

この場面は続いて「にわかにはとんとんと築山の石のあたりに当たって火の光が閃き、おかげで小鳥は驚いて飛び立つ。」という、新しい場面へと転換していく。実は、この「火の光」は藕官(子供芝居の役者)が亡き菡官のために焼いた紙銭(死者を祭るもの)であった。これを発端として芳官・春燕(宝玉付きの女中)が物語に登場し、料理方の柳お婆さんの「鶏卵事件(後述)」へと発展していく。小説の中では華やかな場面ではないが、使用者が主人公となる箇所となっており、プロットにリアリティを与える役割を果たす場面の発端として、この小鳥のさえずりと火の光に驚いて逃げるシーンを用いている。

第82回の鳥のさえずりは、林黛玉が悪夢にうなされて明け方に目覚め、色々と思ひ悩んでいたところ、うとうととまどろんでいるうちに雀の鳴き声によってすっかり夜が明けたことを表わすシーンで使われている。日々繰り返される平凡な夜明けを鳥の声で表わし、そんな中で咳きこんだ拍子に血痰をはいてしまった林黛玉の不吉な予感とを対比している。紫鵲(女中)の動揺、林黛玉のいぶかりと、このあと重く暗い

雰囲気が続く。雀の無邪気なさえずりと林黛玉の短命を暗示する吐血とのコントラストが悲しみを一層増幅している。なお、一説によれば満族では雀が騒ぎだせばその家に不幸が来ると思われていた由である。²⁶⁾あるいは雀が盛んに鳴くことによって林黛玉の病状悪化を暗示したのか。

第91回にみえる「鳥のカアカア鳴き立てる声がかして」は、直前に賈宝玉と林黛玉の二人が「禅問答」をしていたところに聞こえたものである。続いて宝玉が「はて、なんの知らせ、吉か凶か?」というのに林黛玉は「『人に吉凶の事あるも、鳥の音のうちには在らず』というものですわ」と答える。鳥は年取った親鳥に餌を運ぶことから「孝鳥」とも言われたが、反面墓地や暗がりなど気味悪いところに棲みついたため、不吉を象徴することもあった。²⁷⁾ 賈宝玉がその点を案じると、すかさず林黛玉が打ち消す問答である。以前と比べると両者とも幼気が抜けて、知音振りがうかがえるエピソードとなっている。

② 雉

第102回 五色に輝くなにもものかの飛び過ぎるのが目に入りました

第102回 大きな雄の雉が飛んで行ったのを

栄華を誇った買家はやがて公儀よりお咎めを得て、家財没収の憂き目にあう。大観園もすっかりと寂れてしまい、夜にはモノノケが出るとの噂まで飛び交った。そんな中、第51回にも出てきたが大錦鶏つまり雉が棲みついていることが判明し、モノノケの正体が分かった。以前だったら人が大勢住まっていた園に、今は無人となって野生の雉が自由自在に飛ぶという状況に落ちぶれてしまった現在が、くっきりと描かれている。野生の雉であるから、人が近付けば逃げる。柄の大きい雄の雉がさっと闇夜に飛んでいく有様は、確かにモノノケと誤認してしまうだろう。しかし、本物のモノノケが出てもおかしくない園に雉を登場させ、「飛ばした」点

に作者の作意がみえる。

③ 静けさ

第25回 聞こゆるものとは鳥の声

第30回 どこもひっそり閑と静まりかえっています

第32回 しいんと静まりかえり

第36回 小鳥の鳴き声一つするでなく、二羽の鶴までが芭蕉の葉かげで眠っている

第50回 ひっそり閑としております

和訳では鳥が出てこないが、原文では鳥・雀の鳴き声がないことが書かれている。普通は鳥の声をサウンドスケープ（音風景）として用いるのが常套だと思うが、ここでは鳥の声が聞こえないことで静けさを強調している。この静かな状況は次に何かが起こる伏線とも言え、読者の期待感を高める作用がある。一つ一つ検証を試みる。

第25回ではこのあと賈宝玉と王熙鳳が趙氏（賈政の第2夫人）・馬道婆の陰謀によって仕掛けられた呪で気がふれてしまい、屋敷中大騒動になる。

第30回では賈宝玉が金釧児とふざけているうち、彼女がふと「賈環さまと彩雲ちゃんをとらえていらっしゃることですわ（逢引きを捕えろ、という意味）」と言ったことから主人である王夫人（賈宝玉の実母）に聞き咎められ、暇を出されたあげくに金釧児が恥じて井戸に身投げして死ぬという、これも大騒動につながっていく。

第32回では賈政（賈宝玉の実父）が棋官（他家お抱えの役者で、実は蔣玉菡。襲人と結ばれる伏線あり）と賈宝玉が付き合っていることを他人によって知らされ、ほぼ同時に金釧児の身投げを賈環よりねじ曲げられた形で耳にし、大いに腹立ってひどい折檻をはじめる場面に発展していく。

第36回は薛宝釵が襲人に会おうと怡紅院（賈宝玉の住居）に来たところ、襲人が針仕事をしていたので、少し彼女に替わって刺繍をしてい

る場面に続く。薛宝釵はそこで午睡中の賈宝玉が「金玉（薛宝釵と賈宝玉）の姻縁だなんて、なんのことだ。わたしの頭にはあくまでも木石（林黛玉と賈宝玉）の姻縁しかないのです」と寝言をいうのを聞き呆気にとられる。ここで読者は賈宝玉の内心を薛宝釵と一緒に聞くことになり、複雑な心境にさせられる。

第50回「ひっそり閑としております」の後は王熙鳳が賈惜春（寧国府当主賈珍の妹。絵心があるので賈母から大観園図を描くよう要請されている）の所にいた賈母を迎えに来る場面が続く。その帰路に梅枝を持った薛宝琴（薛宝釵の従妹）と賈宝玉の姿が絵になると、後に賈母が賈惜春に大観園図に描き入れるように命ずる。この美しいシーンは読者にしっかりと記憶される場面だ。

このように、良くも悪しくも「ひっそり」している次には何かしら「事件」が発生していることが分かる。

2. 人工の鳥「風箏」

2-1. 小説にみえる風箏

「風箏」とは風の事である。²⁸⁾ 風箏は空に飛ぶことから人工の鳥と言われ、実際に墨子「魯問」に「木鳶」という語がみえ、木で作った鳶を飛ばしたのだろうと想像される。その歴史は古く、最初は軍事用に作られたと言われる。²⁹⁾ 詩文にも登場し、中唐詩人、元稹の「有鳥二十章・紙鳶」という詩が嚆矢とされる。³⁰⁾ 明清時代には清明節の遊戯³¹⁾として発展した。夜に花火を仕込んだ風箏を揚げ、楽しんだともいう。³²⁾ また、栗・桂円・銀杏・竹などでつくった「笛」を風箏に付け、音を鳴らすことも盛んに行われた。音を出すので「風箏」の名称がある。³³⁾ また、自分の名を書いて飛ばし厄除けにすることもあったといい、『紅樓夢』第70回ではどこからか厄除けのため糸を切られた風が舞い降りてくるシーンを発端に、各自が風上げする箇所がある。作者の風箏に対する描写は非常に微細で、色形から飛ばし方に至るまで詳細な

描写をしている。

窓外の竹のあたりで「ドサッ」と物音がして……一同、跳び上がらんばかりに驚きました。……侍女が大声で「大きな胡蝶風が竹のさきにかかったのですわ」と教えます。……どこのお屋敷で飛ばしたのやら知らないけれど、糸を切ってあるわ。……」黛玉は笑いながら「ほんとにね。だれかが厄飛ばしに飛ばしたに決まっています。……わたしたちのを持っておいで。みなで厄飛ばしをしようではないの」と言いました。……待ってましたとばかり、「エッサエッサ」と総がかりで美人風を運んできました。……「お義理にもきれいだとは申せませんね。探春姉さまの、ほら、あの軟翅つきの大鳳風、あの方がよほどきれいみたい」……宝玉は「昨日、頼のお内儀さんがくれたあの大きな魚風を取ってきて」……「それでは、もう一度いってあの大蟹の方を持ってきてくれ」……この「美人風というのがずいぶん手のこんだこしらえでしたので、すっかりうれしくなり、すぐ揚げるようにと言いつけました。……宝琴も自分の緋色の大蝙蝠を取り寄せます。宝釵も……七羽の大雁を連ねたものでした。……そうこうするうち、侍女たちが手にとりどりの猿（胡蝶型・蜻蛉型などに作り、左右両翼が開合自在になった小さな仕掛け風。親風の糸に通して風の力で糸を滑らせ、親風の糸目まで送り上げる。点火した線香と爆竹とを装置し、のぼり切ったところで爆竹が引火してはぜると、両翼を張っていたしんばりの糸が断れてはずれ、合掌の形になって滑降する。破裂の際、紙包みのなかから紙吹雪が舞い出る趣向のものもある。³⁴⁾）を持ってやってきましたので、しばらくこれで遊びました。……空中に鳳凰風がもう一つ揚がっているのに気づいたので「あれもだわ。どこのかしら？」……「どうやらあの風、からみにくるみたい」……さらに一つ、うなりをつけた、門の扉大の見事な「喜」字風が、中空をさながら鐘を撞いた余韻のよううなりをあげつつ近づいてきます。一同は笑いながら「あの風もか

らみにきますわよ。……あの三つを一つにからませてみたらおもしろいわ」といっていると、くだんの「喜」の字風、案の定こちらの二つの鳳凰風と一緒にからみ合いました。……なんと糸がみな切れてしまい、風は三つとも飄々と風に乗って飛んでいってしまいました。一同は手を拍ってどっと笑い「大した見物だったこと！……」

小説のモチーフとしては上記以外にも太虚幻境で賈宝玉が見た「金陵十二釵・正冊」にある「次には二人して風をあげており」（第5回）、元宵節（1月15日）に出した灯謎「下界のわらべの仰ぎみる 清明節のいろどりよろし 糸が切れれば手応え失せ 怨むまじとて 春風に乗り」「これは風だね」（第22回）にも風箏がみえる。この二か所は、遠く離れた所へ嫁ぐ運命の賈探春を暗示している。

第70回に見える風上げシーンで大鳳風が二つからみ、さらに「喜」字風がからんで糸がきれた、その大鳳風の持ち主も賈探春だった。

2-2. 再び『南鶴北鷹考工志』について

1973年『文物』に発表された吳恩裕の論文「曹雪芹的佚著和传记材料的发现」は学会を大いに沸かせた。『紅樓夢』以外の曹霽の著作である『廢藝齋集稿』が発見されたという報告だった。その概要は以下の通り。

- 第一冊 金石（逸）
- 第二冊 「南鶴北鷹考工志」風箏（手稿）
- 第三冊 編織（鴛鴦戲水錦の図案が残存）
- 第四冊 脱胎（風箏用の鷹頭が残存）
- 第五冊 織補（逸）
- 第六冊 印染（逸）
- 第七冊 彫刻竹制器皿と扇股（逸）
- 第八冊 「斯園膏脂」烹調（一部）

この論文の前言部分が松枝茂夫（早稲田大学教授、当時）によって毎日新聞学芸欄に掲載され、日本にも伝えられた。³⁵⁾ また第二冊「南鶴

北鷹考工志」手稿作業のいきさつに日本人二名が絡んでいたとされた事でも注目された。しかし、その後1970年代後半の議論で偽書説が出て³⁶⁾、民国初年の作とほぼ断じられた。ところが、1990年代後半から風箏関係の書籍に「曹雪芹」の名を冠するものが出て来て³⁷⁾、日本の風研究者においてはあたかも定説のように扱われている。

確かに『廢藝齋集稿』の章建てを概観すると、風箏・図案・織補・竹制器皿と扇股・烹調については『紅樓夢』の中にそれらの描写があるし、特に前項で述べた風箏は大変微細な描写となっている。曹霑の手になったものと言っても信ずるに足るような気がする。しかし、「南鶴北鷹考工志」手稿作業に関する有力な裏付けがないまま曹霑作だと断じるにはあまりにも疑問が残ることも事実である。『紅樓夢』の愛読者か、風箏の関係者が偽作した可能性が捨てきれない。³⁸⁾ さらに、晩年（といっても30~40歳くらいと言われる）曹霑は『紅樓夢』決定稿に心血を注いでいたのであり、『廢藝齋集稿』を執筆する精神的な余裕があったかも疑問である。曹霑は小説の中で風箏について語りつくしたのではないだろうか。あるいは絵を売ってしのいだ生活の中で風箏の図案を書いたかもしれない。清の富貴な出身ならではの豊富な体験に基づいた、民間農民作家を凌駕する作品をものしたかもしれない。いずれにせよ、「曹雪芹」を冠した風箏の本は多分人気を博し、そのまま定説となる可能性が高い。

3. 食物としての鳥

3-1. 紅樓夢の鳥料理

『紅樓夢』には多くの鳥料理（卵・燕窩を含む）が登場する。回に従って列挙し、その次に特徴を考察することとする。

- 第8回 鷺鳥の足のうら 鵝掌
- 第8回 家鴨の舌³⁹⁾ 鴨信
- 第8回 さっそく自家製の糟漬けにしたのを

糟的（鵝鴨）

- 第10回 燕窩湯を半碗飲んだ⁴⁰⁾ 燕窩
- 第20回 焼きたてほやほやの雉⁴¹⁾ 野雞
- 第40回 お屋敷では鶏までが器量よし 鶏兒
- 第40回 鳩の卵のはいった⁴²⁾ 鴿子蛋
- 第40回 この鶏の卵は小作りだが 雞蛋
- 第41回 鶏の胸肉 雞脯子肉
- 第41回 炒めた鶏瓜子と 雞瓜
- 第41回 十羽の余も鶏を使う⁴³⁾ 雞
- 第41回 松の実入りの鵝粉糕 松穰鵝
- 第45回 上等の燕窩の大きな包み⁴⁴⁾ 燕窩
- 第45回 燕窩をしまいこみ 燕窩
- 第46回 鶉を二籠ほど 鶉鶉
- 第46回 鶉を揚げさせ⁴⁵⁾ 鶉鶉
- 第49回 燕窩を届けてくれたこと 燕窩
- 第49回 雉の脚の肉のふりかけを 野雞瓜蓋
- 第50回 粕づけの鶉⁴⁶⁾ 糟鶉鶉
- 第50回 脚のところを 腿子
- 第50回 もうごくやわらかい雉を 野雞
- 第51回 雉だの 野雞
- 第52回 あなたに上げなされた燕窩 燕窩
- 第53回 西洋種家鴨二つがい 西洋鴨
- 第53回 活き鶏・家鴨・鵝鳥各二百羽 風雞・鴨・鵝
- 第53回 雉・兎各二百つがい 野雞・兎子
- 第54回 家鴨の肉のお粥が用意させてございませう⁴⁷⁾ 鴨子肉粥
- 第57回 「燕窩が」とひとこと 燕窩
- 第57回 燕窩を摂るからには 燕窩
- 第57回 燕窩を届けて 燕窩
- 第57回 燕窩を届けて 燕窩
- 第61回 大きな家鴨の肉を 鴨子
- 第61回 鶏卵を一碗⁴⁸⁾ 雞蛋
- 第61回 鶏卵がばかに払底していて 雞蛋
- 第61回 手に入らないほどだよ 雞蛋
- 第61回 鶏卵の買い出しに行つて 雞蛋
- 第61回 鶏卵をお願いすれば 雞蛋
- 第61回 鶏卵までが切れているとは 雞蛋
- 第61回 十いくつもの鶏卵が入つて 雞蛋
- 第61回 鶏卵だ 雞蛋
- 第61回 鶏卵の購めにくいというのは 雞蛋

| | | |
|------|-------------------------------------|--------|
| 第61回 | 家鴨二羽 | 大鴨子 |
| 第61回 | ご自分の産みなさった卵 | 蛋 |
| 第61回 | 産みたての卵なのだよ | 蛋 |
| 第61回 | 一碗の鶏卵を蒸し | 蛋 |
| 第61回 | 豚で炒めますか鶏で炒めますか | 肉・鶏 |
| 第61回 | 鶏二羽 | 鶏 |
| 第61回 | 肥えた鶏 | 肥鶏 |
| 第62回 | 塩漬けの鵝鳥 | 腌鵝 |
| 第62回 | 塩漬けの臙脂色をした鵝鳥の脯 ⁴⁹⁾ | 臙脂鵝脯 |
| 第62回 | 家鴨の頭が半分 | 鴨頭 |
| 第62回 | 家鴨の肉をはさみあげて | 鴨肉 |
| 第62回 | 酒蒸しの家鴨が一碗 ⁵⁰⁾ | 酒釀清蒸鴨子 |
| 第62回 | 席上に鶏料理が出ている | 鶏 |
| 第65回 | 身の入った鵝鳥を | 肥鵝 |
| 第62回 | 蝦団子入りの鶏の血を凝らせたもののスープ ⁵¹⁾ | 蝦丸鶏皮湯 |
| 第75回 | 鶏髓筍でございまして ⁵²⁾ | 雞髓笋 |
| 第75回 | 鶏を落とし鴨を潰す | 鵝・鴨 |
| 第80回 | 鶏だの家鴨だのを落とさせると ⁵³⁾ | 鴨鶏 |
| 第80回 | 肉は人にくれてやって | 肉 |

① 燕窩

小説では黛玉・王熙鳳・秦氏らが燕窩を病時に摂っていて、薛宝釵に「毎朝、上等の燕窩1両分と氷砂糖5銭分とを、銀の銚子で煮いてお粥にこしらえなさい。食べつけたら、お薬などよりよほど効きますの。(第45回)」と言わせている。燕窩はむろん高級品で値が高い。貴族階級ならでの食材と言えよう。

この中で一番燕窩を摂ったのは林黛玉である。この人は元々蒲柳の質であったが、とかく内向する性格で、吐血までしてしまう。現代医学の立場から彼女は鬱病だったのではないかとの論文すら存在する。⁵⁴⁾ 小説では薛宝釵が林黛玉のために燕窩を毎日届けさせるよう口添えし、二人の友情譚としている。

② ハトの卵

劉ばあさんが大観園で初めてハトの卵を吸い物に見つけ「お屋敷では鶏までが器量よしだと見え、産んだこの卵の小作りながらも立派なこと。あんまり器量よしだもんで、ためしに一つ腹につめこんでみとうなりましたわい」とすると王熙鳳が「一つが銀子一両もするのですよ。さあ、召し上がれ、冷えたら、味が落ちますから」というくだりがある。(第40回) 劉ばあさんの言葉から「見たこともない、変わった卵」がハトの卵だと分かる。

ハトは遠くに飛んでいき、また帰ってくることから強い鳥との認識を持たれ、ハトの卵は滋養強壯作用があると信じられていた。また、俗説でハトは生殖力が旺盛なので、その鳴き声が「勃勃bóbó」という、などとも言われる。いずれにしても富貴な家ならではの食材である。

大きさは鶏卵と鶉卵の中間。特徴は、加熱しても卵白が白変せず半透明で美しいことである。⁵⁵⁾

そんな珍しいものを見つけた劉ばあさんは勧められるまま箸で挟もうとするが、ツルツルと滑って卵が転げまわる。ついに「ころころ床をころげます。すばやく床に控えた召使が拾いあげて出ていってしまいました。『なんと、銀子一両分が音もなしに消えちまったわな』一同はもう食事もなにもそっちのけで、いい見世物ができたとばかり、婆さんに視線を集中させます」という事態になった。ばあさんの方も買母を笑わせよう、楽しませよう、という気持ちがあるだけに、口八丁の王熙鳳との会話もテンポ良い。豪華かつ笑いに満ちた宴をハトの卵が演出したのだ。

③ 茄鯨

「鯨」とは魚の干物のことである。浙江省の方言とのことである。⁵⁶⁾ 明清時代では魚のみならず、瓜や茄子を干物にしていたことが記録に散見する。⁵⁷⁾ これは保存食という原始的な理由とともに、変わった歯ごたえや味を求めた結果のように思える。しかも、「鯨」字には「魚」

が含まれているのに実際には魚ではない、そういった遊び心あるネーミングだ。『紅樓夢』では版本によって二種類の作り方が示されているが、いずれも鶏を使用している。(第41回)

一つは、「4・5月時分の新茄子ばかりもぎまして、皮とわたをそっくり取りますの。いい身のところだけ残し、毛筋ほどの千本にして、陽なたで乾し上げます。それから肉のついた牝鶏を一只使って、とろ火でおだしをとり、いまの茄子の千本をその鶏のおだしを入れた蒸籠で蒸し上げて味をしませ、また取り出して陽なた乾しにしますの。こんな手順で九遍蒸しては陽なたで乾せば、シャキシャキに乾し上がること請け合い。それをこんどは瀬戸物の壺につめて、びっしり目張りをしてしまうのですわ。いただく段になったら、一皿分ずつ出して、炒めた鶏瓜子(雉・鶏の賽の目に切った肉)と和えたらよらしいの。」

いま一つは「採りたての茄子の皮を剥ぎ、きれいな身だけをとり、細釘のように切り、鶏の油で炒める。別に鶏の乾肉・香菌・麻菇・五香豆腐乾子・種々の乾果類を皆細切りにし、合わせて鶏のスープで煮、乾かす。ついで香油でサッと揚げ、酒糟と油とを混ぜ、瓶に入れて密封する。食べる時には炒めた鶏瓜子でかきまぜれば宜しい。」⁵⁸⁾

いずれも手間暇がかかっており、茄子料理というよりは料理名の奇抜さと作り方の複雑さとが相まって、来客へ自慢げに勧める料理だったのではないか。実際『紅樓夢』では賈母が劉ばあさんに茄蕪を勧めている。

「茄胙(茄蕪のこと)をはさんで食べさせてあげるさね」と口を出しました。熙鳳はいわれたように茄胙をはさんで、劉婆さんの口のなかへ入れてやり、さて笑いながら「あなたがたはお茄子なら毎日上がっていらっしやることでしょうが、わたしどものお茄子も、お口にあう

ようにできておりますかどうか、味見をしてみてくださいいな」婆さんも笑いながら「婆めをたぶらかさないでくださいませよ。茄子にこんなお味がいたしますものか……」

「なんとはや！十羽の余も鶏を使わねばなりませぬので…。かほどのお味がいたすのも道理でございますな」

茄子は血圧を下げ、血管の破れるのを防止する作用があるので、老人に最良の食材とされる。⁵⁹⁾ 賈母が劉ばあさんに茄蕪の味見をさせたのも、単に自慢料理の披露ということよりも、やはり老人に合った食材で身体に良いから、という側面もあるかもしれない。

なお、茄蕪は北京「来今雨軒(レストラン)」で「紅樓菜」の一つとして再現されている。

まず茄子を賽の目に切り、強火の油で時間をかけて揚げる。揚げ終わったら、他の具材(緑・赤のピーマン、鶏肉、干し豆腐、椎茸、筍)とともに、糟酒、紹興酒、味精、塩、砂糖などで味を調えながら炒め、仕上げに水溶きデンプンでトロミをつける。ここに、もう一方の具材である種子、木の実を炒めたものをかけ、完成。赤、緑、黄、白などの配色があざやかな料理である。

「原文どおりのレシピで再現したならば、おそらく採算割れで経営を圧迫するに違いない。食材が茄子では、背後でいくらコストがかかろうと、高価格が設定できないからである。(逆に言えばこれが貴族の料理の凄みでもある)。来今雨軒が「茄胙」ではなく「茄蕪」という発想で、彩りと歯応え、舌ざわりをモチーフとする方向に転換したのは賢明といえるかもしれない。」⁶⁰⁾

というコメントが付いている。現代風アレンジ料理とはいえ、こちらも手間暇がかかっていて、十分に貴族的な香りがする。

この点について「ぜいたくな料理をとくどく

として述べる反面、それを実際に調理する職人、厨師に対してはさげすみの目で見、その労苦を理解していない」と批判する学者もいる。⁶¹⁾しかし、『紅樓夢』では後述(⑤鶏卵事件)のように実際に調理する人たちへの温かい眼差しがあり、決して蔑視している訳ではない。むしろ茄蕪の如く田舎者の度肝を抜くような料理レシピを所有しており、それを作ってくれる人手がある点が作者の言わんとしたことではないだろうか。

④ 鴨と鵝

鳥を使った料理の中で、特に多いのが鴨(アヒル)と鵝(ガチョウ)である。

鴨は「雄鴨夏嫩冬肥(雄鴨は夏軟らかく冬は脂がのる)」とか「諸禽貴雌，唯鴨貴雄(どの鳥も雌が良いが、鴨だけは雄が良い)」などと言われているようだ。⁶²⁾鶏よりもカロリーが低く、老人の身体に適しているという。⁶³⁾また、鴨は気味が「寒冷」なのでネギなどと一緒に調理することが勧められており⁶⁴⁾、有名な「北京烤鸭(ペキンダック)」も細切りの長ネギとともに食べるし、本邦でも「鴨南蛮」には長ネギが必須だ。

鵝は「鴨食魚虾鸡食虫，鵝食百草性味清。(鴨は魚やエビを食べ、鶏は虫を食べる。鵝は百草を食べるので味に混じりけがない。)」と俗に言う。⁶⁵⁾また、鵝の血は毒矢の解毒や食道癌の治療に用いられた。銀を扱う人は毎月一羽の鵝を食べることで鉛中毒を避けられるということだ。⁶⁶⁾さらに、曹霑のほぼ同時代の袁枚(1716-1797)は『隨園食單』に「雲林鵝」を載せていることから⁶⁷⁾南方でとりわけ鵝が好まれていたことが分かる。

また、第62回の「酒釀清蒸鴨子」は乾隆年間の揚州料理だそうだ。⁶⁸⁾

また、第62回にみえる酒令で出てくる鴨について。

(史湘雲は)酒を飲み、一切れ家鴨の肉をは

さみ上げて口中に放りこんだところ、ふとお碗のなかに家鴨の頭が半分入っているのに眼を留めました。そこでこれをはさみ上げて脳味噌のところを食べにかかります。一同は彼女に向かってせきたて「ねえ、召し上がってばかりいないで、気を持たせずにさっさとおっしゃいよ」湘雲は箸で(家鴨の)頭を持ち上げて、こういきました。——この鴨頭ヤアトウかの丫頭ヤアトウとは品かわり 桂花油を 頭上もとに討めんすべもなし——一同は前にもましてどっと涌きました。それに釣られて、晴雯・小螺・鶯兒といった連中までがどやどやと押しかけ……

このシーンでは、酒令のルールを格調高く「酒面には昔の人の文章から一句、昔の人の詩から一句、骨牌の名から一句、曲牌の名からも一句、それと暦の文句からもう一句出し、寄せあつめて全体が意味の通るようにすること、酒底には人事に関係のある果物・野菜の名を挙げるのです」と史湘雲自らが決めたのに、家鴨の脳味噌を食べるのに集中したり、口を開けば「鴨頭」と「丫頭(女中の意味)」の掛け言葉を発したりと、食いしん坊・やんちゃぶりを発揮する。そこに女中連中が押しかけて抗議をする、という展開はあたかも漫才を聞いているようで滑稽だ。そうしたやり取りの中にも、文字を知らないと酒令ができないし楽しめない、貴族社会のお嬢様たちを詳細に表現した作者の筆はなめらかだ。

⑤ 鶏卵事件

これは料理方を務める柳おばさんに降りかかった事件である。発端は第61回で迎春の侍女見習蓮花兒が「司棋姉さんのご注文で、鶏卵を一碗、半熟にしてもらいたいとのことでした」という一言から始まる。

柳おばさんが卵はない、という材料箱から十いくつも卵が出てきて、ひと悶着が始まった。ついに司棋が乗り込んで来て現場を滅茶苦茶にする。柳おばさんは形成不利と見ると一応謝り、鶏卵を一碗蒸して届けた。司棋は怒りに

まかせてそれをぶちまけてしまう。

この時の柳おばさんの大演説がふるっている。

あんた、口はばったいことをいうのもたいがいにしなさい！……ぜんぶ寄せてもこれこのいくつかりなく、料理の上に浮かせる分を取っておいたのだから、姫さんからのご注文さえなければ、こちらからわざわざこしらえることもないのでね、急場の用にと取り除けてあるのさ。それをあんたたちに平らげられてしまったのでは、万が一出すようにとのご注文を受けた際、結構なものはおろか、鶏卵までが切れているといういたらしくになってしまうよ。あんたらは奥まっただっぴろいお屋敷うちに暮らしていて、お湯がくれば手を差し出し、ご飯が出れば口を開ける。鶏卵などざらにある品だと思いきんでいて外部での売り買いの相場など承知していよう道理もないがね。これなどはいうにおよばず、年によっては草の根まですっかりなくなってしまう日さえあるのだから……。わたしにいわせればあの人たちはまっ白な米のご飯に、毎日肥えた鶏や大きな家鴨の肉を召し上がっておいでだが、ちっとは我慢ということをなさったらどんなものだろう。……こちらは一番のご主人のご用をつとめることなどできやしない、あんたたち二のご主人のご用だけで手いっぱいということになってしまうよ。

柳おばさんは「一番のご主人のご用をつとめる」事を第一に考え、いざという時の為に鶏卵を隠しておいて出さなかったのだ。これを聞かされた蓮花兒は思わず「だれがそう毎日毎日あなたのところへ注文にきました？ そんな、車に二杯分も長説教を聞かされるおぼえはありませんよ。……」とぼやく。

作者は料理方と侍女見習という、屋敷内では最底辺に位置する二人のやり取りを、愛情を以て描いている。柳おばさんは「二のご主人」には我慢してもらわなければ調理材料の見通しが狂うことを主張し、蓮花兒は司棋の為に

一生懸命防戦する。いずれも自分の役目に一生懸命なのである。決して底辺にいる人々を軽蔑している訳ではなく、逆に彼女たちの苦勞を書きとめている。小説にこのような日常の、使用人の葛藤が描かれることは以前なかったことで、その意味ではこの「鶏卵事件」は、柳おばさんの面目躍如たるエピソードではないか。

なお、中国語では「蛋(卵)」を罵語としてよく使う。このシーンでは繰り返し「蛋」と叫ばれているはずで、威勢の良い料理方のおばさんが江戸っ子のようにポンポンッと話すさまは、活きのよさや気風のよさを余すところなく表現している。

⑥ 鳥料理と畜獣料理

『紅樓夢』にみえる鳥料理と畜獣料理とを比較すると、おおよそ鳥類が60例なのに対し、畜獣は44例となっており、3：2ほどの割合で鳥類が多い。現代でもそうだが中国での肉の消費量は豚>羊>鳥の順になっており、特に豚は「肉」と言っただけで豚肉を指すほどに一般的だ。その理由は、漢族や満族において古くから祭祀の犠牲として豚が捧げられ、祭祀終了後にそれを人間がいただくという歴史があったからと考えられている。犠牲に用いる物はもちろん神様がお好みになる物であるから、自分たちにとっておいしいものが良いものと判断され、結局それをお供えすることになる。つまり、祭祀で用いる食物は自分たちの好みのものである。そこで豚が非常に一般化した。逆に、鳥は個体が豚などと比べて小さいので、調理に手間がかかる。そういったことから鳥は高級な食材とみなされてきた。

この小説で3：2の割合で鳥料理が多いことは、高級食材をふんだんに使える財力と「おいしい」と感じる食べ手の感性によって、登場数が多くなっているのではないだろうか。

また、概して北方食文化は大らかで単純な味付けなのに対し、南方食文化は繊細な調理方法や多様な味付けが特徴と言える。この点からも鳥料理はとかく単調になりがちな日々の食生活

を、変化をつけ易い鳥を多く用いることで目先を変える働きがあるのではないか。

宝玉がなにげなく、一昨日あちらの珍さんのねえ嫂さんとこで出た鵝鳥の足のうらと家鴨の舌は結構だったとほめますと、これを聞いた未亡人（薛宝釵の実母）は、負けじとさっそく自家製の糟漬けにしたのを取り寄せて、かれに味みをさせようとしています。（第8回）

「その皿のなかのはなにかえ？」一同はいそいで運んできて、「これは糟づけのうずらでございます。」と答えます。後室（賈母のこと）は「これならよかろう、1・2本も脚のところを裂いてもらおうよ」と注文しました。（第50回）

……なかには、蝦丸鶏皮湯（蝦団子いりの鶏の血を凝にこらせたもののスープ）が一碗、それと酒蒸の家鴨が一碗、塩づけの臙脂色をした鵝鳥の脯が一皿、……宝玉はにおいを嗅いでいるうちに、これはいつものよりおいしスープそうだとぞと、……ご飯を半膳ほどよそわせ、湯をかけてちょっと食べてみましたが、その味というのがなかなかいける……。 （第62回）

このお碗の方は鶏髓筍（鶏の骨髓と筍とを取り合わせた吸物）でございます、外のお殿様（賈政）から到来の品でございます。（第75回）

以上4例を挙げたが、いずれも手の込んだご馳走である。特に、第8回にもあるように中国では鳥を調理するのに肉以外の部位—内臓・鶏冠・皮・爪・足の裏・舌など—が珍重されてきた。第62回では「鶏の血を凝らせたもののスープ」、第75回では「鶏の骨髓」までが登場する。これらの記述は鳥を食べてきた歴史の長さを物語っていると同時に、珍しいもの美味しいものへの関心の高さが反映されている。

『紅樓夢』を考察するのに先行小説『金瓶梅』

を抜きにしては語れない。元々『紅樓夢』は『金瓶梅』のような作風のものであったらしく、衣食住その他にわたる微細な描写が両者に共通している。そこで『金瓶梅』の料理を調べてみると、鳥類が43例に対し畜獣が67例で、おおよそ2：3の割合で畜獣が多い。⁶⁹⁾ その理由は、主たる登場人物の年齢に関係があるだろう。

つまり、『金瓶梅』では壮年の男女が多く、かつ宴席シーンが大変多いので、自然と高カロリー料理が並んだのであろう。しかるに『紅樓夢』は少女と老人が主たる飲食する人たちなので、粥や畜獣に比べて低カロリーの鳥などが多いと推測できる。このような理由でおそらく『紅樓夢』の鳥料理が比較的多いのではないか。

3-2. 「老蚌懷珠」について

「1-3 野鳥 ①雀・鳥」に「第24回 軒ばで雀を巣からとりだして遊んでいます」を取り上げた。この稿では、曹霑が晩年北京で暮らしていた時期に交際していた敦敏の『瓶湖懋齋記盛』にみえる、曹霑が作ったとされる料理を考察する。⁷⁰⁾

「芹圃（曹霑のこと）が南味を作るのがうまいのを知っているか？……スープに酒を少し入れると味がとても良くなった。……名は知らないが魚の腹にタケノコを入れた。……友人が箸で魚の腹を軽く開いてみると、明珠がキラキラと入っている。多分雀の卵だろう。……この料理は『老蚌懷珠』という……江南料理だ。」

というくだりがある。第24回ではまだ羽根も生え揃っておらず、飛べないほどの子雀を巣から出して遊んでいる情景であったが、そうであれば巣から卵を取り出して茹で、それを料理の材料にすることも不可能ではない。ただし、雀の繁殖期はおおむね春なので、鶏とは違い一年中手に入るというものでもないだろう。そんな小さな真珠のような卵を魚の腹に詰めるという発想は、富貴な出身ならではのものだ。

ところで実は、「老蚌生珠」という諺があり

「年老いてから賢子を授かる」という意味だ。⁷¹⁾「蚌」はドブガイ（カラスガイ・イガイ。ムラサキイガイはムールガイのことで、淡水で真珠を生成することがある）のこと。⁷²⁾原義は「年老いたドブガイが真珠を生むこと」である。この料理は、もし仮に曹霑の創作料理だったとすると「老蚌生珠」の「生」を「懐」に取り換えた、非常に彼らしいネーミングだ。『紅樓夢』の中には双関語（掛け言葉）が満ち溢れており、人名などはほとんどと言っていいほどだ。一例を挙げれば主人公の「賈玉宝」は「銜玉賈石 xuányùgǔshí（玉を見せびらかして石を売る→言行不一致）⁷³⁾」から発想されたものである。このように、曹霑は本邦江戸時代の戯作家のように掛け言葉やしゃれ言葉を好む。⁷⁴⁾

なお、浙江料理に「鳳凰金珠」というものがあり、ハト肉と栗の蒸し物である。⁷⁵⁾こちらは栗とハト肉のシーズン（秋）とが合致していて、季節の食材の取り合わせになっている。曹霑の作った「老蚌懐珠」もシーズンに関係があるか、さらなる考察が必要だ。

4. 虚の鳥

4-1. 言葉

① 人名

| | |
|--------|-----|
| 伴鶴 | 宝玉付 |
| 鸚哥（紫鵲） | 黛玉付 |
| 雪雁 | 黛玉付 |
| （黄）鶯兒 | 寶釵付 |
| （金）鴛鴦 | 賈母付 |
| 鸚鵡 | 賈母付 |
| 繡鸞 | 王氏付 |
| 繡鳳 | 王氏付 |
| 小鵲 | 趙氏付 |
| 王熙鳳 | |

上記のように鳥の名が付いているのはほとんどが下男女中であり、主人に命名された呼び名であろう。そのうちの一人は主人を換え、結局元通りになった。

鸚鵡（賈母）→鸚哥＝紫鵲（黛玉）→鸚鵡（賈母）

物語中では林黛玉の女中といえば紫鵲が目立つが、実は賈母から下された女中であったのであり、名前も鸚鵡だった。そこで前述（1. 実の鳥 1-1. 大観園の飼鳥 ④黛玉）の「林黛玉の口まねをする鸚哥」を再考すると、彼女の飼鳥が鸚哥であり、かつ仕えている女中の旧名が鸚鵡だという事が分かる。作者は林黛玉に色や形が非凡に美しく、人語を語るほど賢く、いずれは飛んで行ってしまう（死を暗示している）鸚鵡とか鸚哥のイメージをもって彼女の形象を創作した可能性がある。いつまでも傍らにいて欲しいのに、いつかはどこかへ飛び去ってしまう「鳥」に、佳人薄命の彼女をなぞらえているのではないだろうか。

人名の中で唯一使用人でないのは王熙鳳である。この人は王家のお嬢様から賈家榮国府当主の息子（賈璉）に嫁いだ。この人物の形象は大変複雑で一言で言い表わすことは困難だ。ざっと述べると、

美点としては：美人・口のきき方がハキハキしている・頭がよく回る・よく気が付く・賈母に気に入られている（孝行者）・家事の切り盛りがうまい・情に厚い（秦氏など）・威厳がある・夫をいたわる

欠点としては：口のきき方がさっぱりしすぎていて汚い言葉をつかうことがある・文字が読めない・男児を産まない・病弱である・実家の兄弟が良くない・夫に焼餅を焼く・隠れて暴利を貪る・賈瑞や尤二姐を死に追いやった

などとなっている。確かに、従前の小説や戯曲では妻たるものは貞淑であるのが当然で、激しい気性や焼餅焼き、さらには家事を取り仕切る男勝りな気配は決して見せなかった。

『金瓶梅』によって女性の典型が色々と示されたのであり、個性の発露という発想はほとんど存在しなかったと言っても過言ではない。と

ころが王熙鳳はさすがに「鳳」字を名前に持っているだけあり、縦横無尽に買家を飛びまわる。宮中にいる元春が本物の「鳳」だとすると、王熙鳳は賈府の「鳳」だ。しかしながら、「鳳」字は「凡鳥」と分解することもできる。家宅搜索を受け、取り調べられる段になって彼女の悪事が暴露されるはめになるのである。(第105回) 夢の中で亡くなった秦氏に「気をつけろ」と警告されていたにも拘わらず(第13回) 先の先まで読み切れなかった「凡鳥」が家事を見ていたのだから、見掛け倒しの火の車だった買家は決定的なダメージを受ける。悲劇の種は一人の「鳳」字を持つ者によって蒔かれていた。

② 諺

第11回 蝦蟇が鶴の肉を食べたがるようなもの
 第17・18回 鳩群鴉属のうちより、鳳鸞の瑞鳥
 のお召し出しがあろうとは
 第30回 「大鷹がはい鷹の脚をひつつかみ」
 第61回 倉の鼠が鳥に食扶持借りる

第11回の蝦蟇と鶴の比喩は「高望みしても叶わない」という意味である。
 第17・18回は「卑下しつつも喜んでいる」表現である。
 第30回は「諍いをやめて仲直り」の意味である。
 第61回は「反転している。立場が逆だ」ということを言っている。

これらを総合すると「無理・喜び・仲直り・反転」などを言うのに鳥や小動物を出して表現している。特に第30回は賈宝玉と林黛玉が喧嘩したものの、王熙鳳に言わせると「鷹が獲物を双の蹴爪でしっかりとほさみつめて放さぬように、親しげに手を取り合った様子」である。猛禽類の特徴をとらえた言い方になっている。

鳥や小動物をたとえに使った理由は、読者が良く知っているものを引き合いに出すことによってイメージが鮮明に湧くという点があるか

らだろう。その一方で「蝦蟇・鶴」「鼠・鳥」などという対比はコミカルなテイストを与えている。型にはまった、手垢にまみれた言葉よりも、コミカルな斬新なたとえを用いることで精彩を与える効果が出てくる。仮に、当時の日常ではこのような表現がよく使われており、作者の独創ではなかったとしても、それらを取り上げて小説に使用することによって、生身の人間性が感じられる。

③ 比喩

第3回 鼻は鵝鳥の脂でこしらえた石鹸のよう
 につややかで、
 第3回 あひるの卵形の面立ち
 第3回 丹鳳を思わせる切れながの三角眼
 第8回 大きさは雀の卵ほどもありましようか
 (宝玉の玉の形容)
 第14回 鶏群の一鶴を思わせる品の備わった
 第21回 そしたら鶏や鵝鳥みたいにいさかいばかりして
 第21回 首をはねられる前の鶏のような眼くばせを送るばかり。
 第26回 そろってバタバタと飛び去って遠くへと逃げ出し
 第28回 とんま雁の仕業で……
 第29回 さしもの大通りをも黒々と車で埋め尽くし
 第30回 どうしてまた軍鶏みたいににらみあいなどなされたのよ！
 第46回 家鴨の卵のように白い顔、鴉の濡れ羽色をしたつややかな頭髮……
 第49回 床にはぎっしりと人垣ができそうなくらい
 第58回 籠に倦んだ鳥が外に出たも同然、くる日もくる日も園内で遊び暮らしています。
 第61回 両の眼をもうあの烏骨鶏そっくりに
 第69回 結構な想いものですよ、
 第75回 烏骨鶏でもあるまいし、
 第78回 残党がまたまた徒党を組んで
 第101回 たがいにお家でもやはり烏骨鶏みたいに睨み合って

この項目では鳥でもって「何か」を例えている用例を集めた。

まず、容姿では鼻・顔の形・顔の白さ・黒髪
の豊かさを例えている（第3・8・46回）

次に、争いに鶏や鵝（第21回）・軍鶏（第30
回）・烏骨鶏（第61・75・101回）が目立つ。実
際に飼育経験がないと「にらみ合う＝烏骨鶏み
たいだ」という比喩は中々出てこないのではな
いか。

さらに、「烏圧圧（ぎっしりと）」が第29・49
回に見える。これは「烏鴉鴉（烏鴉はカラスの
こと）」との双関語（掛け言葉）になっており、
大変面白い比喩である。

なお、第26回に「そろってバタバタと飛び
去って」（原文「忒楞楞tèrlènglèng」）とある
のは、北京語であるとのことだ。⁷⁶⁾ この擬音語
は第28回にもある。

（黛玉は笑いながら）「……実は空でなにやらの
鳴き声立てたのが聞こえたもので、見てやり
ましようとしてきたら、なんとまあとんま雁の
仕業で……」（宝釵は）「してそのとんま雁はど
こにおりまして？ ちょっと見てみたいもので
すわ」「それが出てきたとたんに、つるっと
（忒兒tèr）一声、飛んで逃げましたの」そう口
でいいながら、手にした手帕ハンカチをいきなりぱっと
宝玉の顔をねらって投げつけました。

ここでは賈宝玉を「とんま雁」呼ばわりした
林黛玉と、その行方をたずねる薛宝釵との心理
戦が描かれている。最終的に手帕ハンカチを賈宝玉の顔
に投げつけ命申し「あ痛！」となるのだが、こ
こで第28回を終わらせて次の章へと転換する、
作者の筆は鮮やかだ。

④ 詩語

- 第1回 鏡台のかんざしの待つは飛ぶ時期
- 第5回 鳥は庭木に驚き
- 第5回 飛ぶがごと揚るがごとし
- 第5回 鳳と舞い龍と翔るを
- 第5回 鴛鴦の語らひは

- 第5回 おのがじし飛ぶ鳥は林へ
- 第5回 さてしも餌の尽きて鳥は林に去り
- 第11回 鶯も啼きやめど
- 第17・18回 李太白の「鳳凰台」の詩にしたと
ころで、そっくり「黄鶴楼」をもじったも
の
- 第17・18回 蕉鶴
- 第17・18回 有鳳来儀
- 第17・18回 水の辺に鵝鳥はあそび 夕されば
つばめも梁に
- 第22回 曉籟は鶏人の告ぐるにおよばず
- 第25回 終日まどろむ鴛鴦枕
- 第26回 鳳の尾なす 笹の葉はさつさつと
- 第26回 花は散りしき鳥の飛び立つ
- 第27回 燕も妬み鶯も舌を巻こうと言おうあり
さま
- 第27回 （黛玉の詩）鳥の魂……鳥なれば言葉
あげせず
- 第28回 鶏肉一きれつまみあげ、「鶏の声、旅
籠に残月は射し」
- 第28回 鴛鴦の帳のそのうちに
- 第40回 鳥の嘴もて
- 第62回 雁の鳴くもあわれなり
- 第78回 鳩鳩そが高きを悪みて、鷹鷲の翻りて
- 第120回 いささか鳥の音を借りて呼び帰り去
らしめるとか

詩語に用いられている鳥を分類すると以下の
通り。

- 鳥：9例 鳳：4例 鴛鴦：3例
- 鶯・燕・鶏：2例
- 鶴・鵝鳥・雁・鳩鳩・鷹鷲：1例

これらを見ると、それほど鳥を題材に詩作
しているとは考えられない。その中で、林黛
玉の自詠「花の魂 鳥の魂 留めんすべなし
鳥なれば言葉あげせず 花また差ずれば 願
わくは わが脇に 双翼の生えて 花とともに
飛びゆかな 空の涯に……」（第27回）は、太虚
幻境で奏でられた「紅楼夢・結尾 おのがじし
飛ぶ鳥は林へ」に「さしても 餌の尽きて鳥は

林に去り」(第5回)にみえる「鳥」「林」と呼応しており、林黛玉が鳥になぞらえられていることが分かる。また第120回の「いささか鳥の音を借りて呼び帰りさらしめるとか」の箇所は、ホトトギスが「不如帰去」と鳴くと言われることから、「俗世間の夢幻は人を煩惱させるので、ホトトギスの声でもってその夢をさまし、元の世界に帰らせる」という意味である。つまりここでの「鳥」は「ホトトギス」を指している。

⑤ 実景

第3回 昇る朝日の勢いみせた鳳凰五羽に真珠をかけつらねた簪

第5回 次にはまた二人して風をあげており

第17・18回 山水・人物があるかと思えば、鳥禽・花卉があり、

第17・18回 御簾には五色の鳳が飛び

第17・18回 鳳翼

第17・18回 七鳳

第17・18回 池のなかの荷花・菡や鴨・鷺のたぐいにしても、みな貝がらや羽毛でもって

第17・18回 屏風には雉尾の扇をかけつらねるなど

実景にみえる鳥はやはり鳳凰が最も多い。第3回では王熙鳳のいでたちを描写した部分だが、名の通り鳳凰をかたどった簪をつけている。第17・18回にみえる「荷花・菡(ジュンサイ)や鴨・鷺のたぐいにしても、みな貝がらや羽毛でもって」作ってある、大観園の豪華さを描写している。花や水草を貝がらや羽毛で作るのならそれほど造作ないと思うが、鴨・鷺を作るとなると、かなり本格的な「工芸品」になる。ここでも富貴な家庭での豪華に過ぎたやかたが垣間見える。

⑥ その他

第5回 一羽の雌の鳳がいます……凡鳥の時もあわれ

第36回 鴉や雀もよりつかぬあの奥深い辺鄙な

ところまで送りとどけてくれ、

第46回 うそをつくのは、その止まり木の鸚哥くらいのものですよ

第91回 鷓鴣のごと、舞うことなし

第5回は前述した(4. 虚の鳥 4-1. 言葉 ①人名)のように、王熙鳳のことを言っている。第46回「うそをつくのは、その止まり木の鸚哥くらいのものですよ」と言ったのは林黛玉だ。そして、第91回「鷓鴣のごと、舞うことなし」は賈宝玉と林黛玉の二人が禅問答をするシーンで使われた言葉である。

(林黛玉)「水止まり、珠沈みなば、いかにせむ?」

(賈宝玉)「禅心はや 泥にまみれし 絮なれば、鷓鴣のごと 舞うことなし 春風に向かいて」

ここでは宋の詩僧道潜が妓女に与えた詩「禅心已作沾泥絮，不逐東風上下狂(泥にまみれた柳絮のごとくに禅心は定まって動かず、もはや柳絮が春風を追って上下狂飛するような心の動きもこの身にはない)」に基づき、賈宝玉の気持ちがちがうと固まり、林黛玉への思いは変わらない、という意味である。⁷⁷⁾ この「鷓鴣舞」について考察した論文⁷⁸⁾がある。それをまとめると：

- ・唐代に「鷓鴣曲」が流行した。(笛曲名とのこと)
- ・『異物誌』によると「鄭谷の詩に『坐中亦有江南客，莫向春風唱鷓鴣』とある」そうだ。
- ・金元時代に北方で鷓鴣曲が流行していた。
- ・元代の関漢卿は鷓鴣曲が歌えた。(音程の上下が結構激しい由)
- ・劉東生『嬌紅記』では開場の際、まず鷓鴣舞を舞った。この舞は女真族の舞だという。
- ・『青樓集』では一人舞といい、『十長生』では四人舞という。普通笛の伴奏がつく。
- ・道潜和尚の詩は『苕溪漁隱叢話』に見える。ということだ。

しかし、禅語を愛情表現に転用するとは、さすがの林黛玉をもって「禅門の第一戒はこれ誑語せざる事なのに…」と言わしめている。両者の感情が通ったシーンである。

4-2. 服装飾

① 鵲鴿香念珠

第15回 鵲鴿の香念珠

第16回 鵲鴿づくりの香念珠

鵲鴿とは香木の名という。北静郡王が陛下から賜わった数珠で、賈宝玉に初対面の引き出物として進呈された。(第15回) 鵲鴿は兄弟の情誼を表わす言葉であり、康熙61年に康熙帝が雍正に念珠を賜わったことから「香念珠」は雍正帝(兄弟を肅清して帝位に就いた)を暗示するそうだ。⁷⁹⁾ 第16回で賈宝玉がこれを林黛玉に贈ろうとするものの拒絶した。これは皇権に対する大胆な蔑視であるとされ、『紅樓夢』がブラックリストに載る根拠の一つでもある。作者がそこまで意図したかどうか、小さな香念珠に込められた寓意を物語るエピソードである。

② 雀金呢など

第49回 なにが孔雀の毛なものですか、これは鴨の頭の毛でこしらえたもの

第52回 これは「雀金呢」といってな、俄羅斯国の産、孔雀の毛を糸によって織り上げたもの

第49回で宝琴が賈母からもらった美しいコートを香菱が「孔雀の毛でできているのか」とたずねたところ、史湘雲が「鴨の頭の毛でできているもの」と答えるシーンである。鴨の頭の毛を集めて糸により、それを織ってコートに仕立てる方が孔雀よりも手間がかかりそうだ。しかし、孔雀の毛の方が貴重で値が張るのだろう。

その孔雀のコートだが、賈宝玉はもらって早々にうっかりと焦げ穴を作ってしまう、途方にくれる。晴雯が病を押して徹夜で繕い事なきを得たが、これが元で病状が悪化し命を落とす

はめになる。(第77回) 賈宝玉の大的お気に入りだった晴雯が若い身空で自分の手の届かない世界に行ってしまった、しかも自分の不注意で作った焦げ穴を繕っての事に、彼は茫然自失になった。しかし、死を招いた繕い物が平凡なものではなく孔雀だったことが非凡であった。晴雯の女中らしくないあでやかさ・群を抜いた物腰が孔雀の美しさや貴重さとオーバーラップしている。

③ 鴛鴦劍

第66回 「鴛鴦劍」というのをたずさえておりました

柳湘蓮(賈宝玉の友人)が肌身離さず持ち歩いていた劍で、表に龍と夔が格闘している彫刻が施され、宝石が散りばめられた柳家伝来の家宝である。これを尤三姐(若奥方尤氏の異母妹。気性の激しい女性)との結納品とした。しかし、その後尤三姐が寧国府(賈宝玉の住む屋敷は榮国府で、伯父の家作のこと)の人間だと聞いて(まともな娘ではない)と判断し婚約を破棄した。すると尤三姐が鴛鴦劍で自らの首を刎ねて息絶えた、というエピソードのある劍だ。

名が「鴛鴦」といい、実際に鴛劍と鴛劍とが同じ鞘に入っている劍を、夫婦円満のメタファーを持ちながら破局に与した点で、シニカルなネーミングである。また、尤三姐の激しい感情や自立した思想が小気味よいほど表現されている。この人物形象を構想した理由は、(実際にモデルがいたのかもしれないが)『紅樓夢』中でしばしば語られる文学論「通り一遍の物語」に陥らないよう、男性もだが女性にも個性があり、身分の上下によらず一個人の考え方・ふるまいを描き分けることによって「今までにない、新味のある」小説を目指したからではないだろうか。

おわりに

現代中国の、特に北京の公園では「遛鳥（鳥の散歩）」という風習が見られる。鳥籠にいれた観賞用の小鳥—黄雀（マヒワ）・画眉（ガビチョウ）など—を、多くはお爺さんがゆっくりとブラリと持って公園へ行く。この時、よく揺らしてやると小鳥が止まり木をしっかりと握るので、丈夫なよい鳥に育つという。もちろん、餌をやり声を楽しみ、また鳥仲間と話し合う。一説によると、鳥を散歩させるのではなくお爺さんのための散歩だという。これは清朝の遺物とも言われ、北京の風物詩にさえなっている。「遛鳥」の面影が『紅樓夢』にも見える。「大観園」で飼われている多くの小鳥や水鳥たち。それらは小説に彩りを添え音声効果という役割を果たしている。第25回では画眉鳥に水浴びをさせてやっている。また若君は鷹狩りに行ったりもする。『紅樓夢』では鳥が主人公の身近にいて、生き生きと描かれている。そのような環境にあった人は年を取ると、鳥籠に自らの分身を入れ「遛鳥」しに行くのだろうか。

実景だけでなく、鳥というキーワードで『紅樓夢』を読むと、鳥になぞらえた人物や言動が結構あった。また、「第3章 食物としての鳥」は『金瓶梅』との回数比較をすることができた。小説の作風と禽類の登場回数との相関性は、『紅樓夢』とほぼ同時代の作品『儒林外史』などとの比較を通して、どのような点が特徴的なのかを更に探っていきたい。

本稿は平成22年5月8日に日本大学法学部で行われた国際文化表現学会第6回大会で口頭発表した「小説『紅樓夢』にみえる鳥についての考察」を原稿化したものである。該発表では「第4章 虚の鳥」についての考察が十分ではなかった。本稿で一応「実の鳥」「虚の鳥」について概観できたことは意義があると思う。

注

- 1) 池間里代子「花札の図像学的考察」流通経済大学社会学部論叢, Vol.19, 2009年3月
- 2) 輔民「雀戏」紅樓夢研究集刊, 1980年3月, p.274, 300
- 3) 明銘「唱鷓鴣与舞鷓鴣」1980年3月, p.352
- 4) 晁继周「曹雪芹与高鹗语言的比较」中国語文, 1993年3月, p.34
- 5) 秦一民「紅樓夢飲食譜」山东画报出版社, 2004年1月, p.93-152
- 6) 松村一男『世界と日本の神々』西東社, 2008年7月, p.219
- 7) 庞进『中国鳳文化』重庆出版社, 2007年4月, p.36
- 8) 視覚デザイン研究所編『日本・中国の文様事典』2000年1月, p.297
- 9) 前掲書『中国鳳文化』p.36
- 10) 前掲論文「花札の図像学的考察」p.20
- 11) 前掲書『中国鳳文化』p.71
- 12) 韦明铤『闲敲棋子 落灯花』云南人民出版社, 2007年2月, p.302
- 13) 前掲書『日本・中国の文様事典』
- 14) 使用テキストは『紅樓夢』上下, 人民文学出版社, 1982年3月及び『紅樓夢』上中下, 伊藤漱平訳, 1973年5月
- 15) 曹霑, 字は夢阮, 号は雪芹・芹圃・芹溪(?-1763?)
- 16) 脂硯齋と畸笏叟。曹霑の近親者と目されている。馬経義『中国紅学概論』上, 四川大学出版社, p.10, 2008年12月
- 17) 小山澄夫「『紅樓夢』の背景」(『しにか』所収) 大修館書店, 1992年1月, p.14
- 18) 蔣和森, 小川陽一訳『紅樓夢入門』日中出版, 1985年2月, p.21
- 19) 前掲書『紅樓夢』上中下, 伊藤訳, p.581
- 20) 前野直彬編『中国文学史』東京大学出版会, 1975年6月, p.215
- 21) 田中正樹「中国の聴覚—中国文化に於ける聴覚の使用に関する一考察」山形女子短期大学記要第28集, 1996年3月, p.134
- 22) 文震 荒井健訳『長物志』1, 平凡社, 1999年12月, p.272
- 23) 前掲書『長物志』, p.268
- 24) 物語の構成上、林黛玉は前世が「絳珠草」という仙草で、甘露を灌いでくれた神瑛侍者（賈宝玉の前世）に報いるために涙でもって恩返しをする、となっている。
- 25) 前掲書『闲敲棋子 落灯花』p.210
- 26) 王敏・梅本重一『中国シンボル・イメージ図典』, 東京堂出版, 2003年4月, p.49
- 27) 前掲書『中国シンボル・イメージ図典』p.43

- 28) 「凧」字は国字。
- 29) 徐艺乙『**风筝史话**』北京**工艺美术**出版社, 1997年2月, p.9
- 30) 前掲書『**风筝史话**』 p.10
- 31) 南方の福建などでは秋の重陽節に揚げる風習がある。
- 32) 前掲書『**风筝史话**』 p.13
- 33) 前掲書『**风筝史话**』 p.27
- 34) 前掲書『**紅樓夢**』中, 伊藤漱平訳, p.481の注
- 35) 伊藤漱平「**论曹雪芹晚年的佚著**」**紅樓夢研究集刊**, 1980年, p.325
- 36) 前掲論文「**论曹雪芹晚年的佚著**」 p.333
- 37) 孔祥澤など『**曹雪芹风筝艺术**』北京**工艺美术**出版社, 2004年3月
- 38) 前掲論文「**论曹雪芹晚年的佚著**」 p.356
- 39) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.94
- 40) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.90
- 41) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.106
- 42) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.93
- 43) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.102
- 44) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.34
- 45) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.113
- 46) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.106, 114
- 47) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.31
- 48) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.138
- 49) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.130
- 50) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.136
- 51) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.134
- 52) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.141
- 53) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.147
- 54) 段振离『**医说紅樓**』新世界出版社, 2004年3月, p.5
- 55) 中山時子『**中国食文化事典**』角川書店, 1988年3月, p.298
- 56) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.102
- 57) 篠田統『**中国食物史**』 p.303, 乾隆20年(1755)丁宜曾「**農圃便覽**」「茄蕪, 茄子を煮て, 半煮えの時, 板で押しつぶして平らかにし, 塩を少しふって二日漬け乾かす。好い醬油をふって一夜戸外におき, 磁器に取めて貯える。」とある。板鴨の作り方と類似している。
前掲書『**中国食文化事典**』 p.270「また, 乾し茄子なるものもある。ゆでて乾したものをさらに完全に乾燥させておくと, 半年ぐらい貯蔵できる。これを水でもどして塩漬けにしたのが湖南茄乾, 別名を草鼈甲(スッポンもどき)である。」
- 58) 前掲書『**中国食物史**』 p.295, 商務院書館版による注がある。
- 59) 前掲書『**中国食文化事典**』 p.270
- 60) 重森貝崙「2009年『**北京の食文化 資料映像編**』制作記(前編)」中日文化研究所, 2009年12月, p.166-167
- 61) 木村春子「『**紅樓夢**』に見る清朝貴族の食生活」月刊しにか, 大修館書店, 1992年1月
なお, 注によればこの「学者」とは吳恩裕であるとのことである。
- 62) 胡德榮『**金瓶梅飲食譜**』**经济日报**出版社 1995年9月, p.44
- 63) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.31
- 64) 前掲書『**中国食文化事典**』 p.296
- 65) 前掲書『**金瓶梅飲食譜**』 p.92
- 66) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.130
- 67) 前掲書『**紅樓夢飲食譜**』 p.132
- 68) 马经义『**中国红学概论**』四川大学出版社, 2008年11月, p.191
- 69) 前掲書『**金瓶梅飲食譜**』 p.167-168
- 70) 吳恩裕「曹雪芹の佚著和**传记材料の发现**」『**文物**』1973年, p.7-8
- 71) 『**汉语成语词典**』上海教育出版社, 1981年12月, p.334
- 72) 前掲書『**中国食文化事典**』 p.338
- 73) 前掲書『**汉语成语词典**』 p.678
- 74) ちなみに, 『**廢藝齋集稿**』第8冊「**斯園膏脂**」は「飲水思源(水を飲むときはその源を忘れるな)」と「**民脂民膏**(人民の汗と脂)」との折半で, これも曹霏が付けた書名らしくみえるが。
- 75) 前掲書『**中国鳳文化**』 p.196
- 76) 前掲論文「**曹雪芹与高鹗语言的比较**」 p.34
- 77) 『**紅樓夢**』下, 伊藤漱平訳, p.159
- 78) 明銘「**唱鷓鴣与舞鷓鴣**」**紅樓夢研究集刊**, 1980年3月, p.352
- 79) <http://pingshan.parfait.ne.jp/honglou>

原 文

1. 実の鳥

1-1. 大観園の飼鳥

① 点景

第3回 掛著各色鷓鴣, 畫眉等鳥雀

第14回 不覺天明雞唱

第17・18回 只是買些鷓鴣雞類

第17・18回 採辦鳥雀的, 自仙鶴, 孔雀以及
鹿・兔・雞・鵝等類

第25回 都在回廊上圍著看畫眉洗澡呢

第26回 兩隻仙鶴在松樹下剔翎

第26回 一溜回廊上吊著各色籠子, 各色仙禽異
鳥

第26回 在回廊上調弄了一回雀兒

- 第26回 只見各色水禽都在池中浴水
 第27回 正在那邊看鶴舞
 第30回 把些綠頭鴨・花鵝・彩鴛鴦…縫了翅膀，在院內玩耍
 第76回 卻飛起一個白鶴來，直往

② 小紅と小鳥の餌やり

- 第27回 雀兒也不喂……我喂雀兒的時候，姐姐還睡覺呢

③ 劉ばあさん

- 第41回 連雀兒也是尊貴的
 偏這雀兒到了你們這裡，他也變俊了，也會說話了
 那廊下金架子站的綠毛紅嘴是鸚哥兒，我是認得的
 那籠子裡黑老鴿子怎么又長出鳳頭來，也會說話呢

④ 黛玉

- 第35回 不防廊上的鸚哥見林黛玉來了，嘎的一聲扑了下來，那鸚哥仍飛上架去，便叫「雪雁，快掀帘子，姑娘來了。」[添了食水不會？] 那鸚哥便長歎一聲，竟大似黛玉素日吁嗟音韻，接著念道：儂今葬花人笑癡，他年葬儂知是誰？[這都是素日姑娘念的，難為他怎么記了。黛玉無可釋悶，便隔著沙窗調逗鸚哥作戲，又將素日所喜的詩詞也教與他念。

- 第89回 只聽鸚鵡叫喚，學著說「姑娘回來了，快倒茶來！」嚇了一跳，回頭並不見有人，便罵了鸚鵡一聲，走進屋內。

⑤ 齡官

- 第36回 手裡又提著個雀兒籠子，上面扎著個小戲台，并一個雀兒是個甚么雀兒，是個玉頂金豆。買了雀兒你玩，省得天天悶的無個開心便拿些穀子哄的那個雀兒在戲臺上亂串，你這會子又弄個雀兒來，也偏生幹這個那雀兒雖不如人，他也又個老雀兒在窩裡，

1-2. 若君と鳥

① 鷹狩り

- 第26回 是前日打圍，在鐵網山教兔鶻捎一翅膀
 第47回 前日我們幾個人放鷹去

② 鬪鷄

- 第4回 終日惟有斗雞走馬
 第7回 偷狗戲雞
 第9回 斗雞走狗

1-3. 野鳥

① 雀・鳥

- 第24回 又在房檐上掏小雀兒玩
 第32回 那邊兩個雀兒打架
 第51回 原來是那個大錦雞，
 第58回 忽有一個雀兒飛來，落於枝上亂啼
 第82回 聽得竹枝上不知有多少家雀兒的聲兒，啾啾唧唧，叫個不住
 第91回 只聽見檐外老鴿呱呱的叫了幾聲，便飛向

② 雉

- 第102回 只見五色燦爛的一件東西跳過去了
 第102回 明明是個大公野雞飛過去了

③ 静けさ

- 第25回 惟見花光柳影，鳥語溪聲
 第30回 一處鴉雀無聞
 第32回 只見鴉雀無聞
 第36回 鴉雀無聞，一并連兩隻仙鶴在芭蕉下都睡著了
 第50回 鴉沒雀靜的

2. 人工の鳥「風箏」

2-1. 小説にみえる風箏

只聽窗外竹子上一聲響，眾人嚇了一跳。簾外丫鬟嚷道「一個大蝴蝶風箏掛在竹梢上了。」[不知是誰家放斷了繩，]黛玉笑道：「可是呢，知道是誰放晦氣的，把咱們的拿出來，咱們也放晦氣。」巴不得七手八腳都忙著拿出箇美人風箏

來。[不如三姐姐的那一個軟翅子大鳳凰好。] [把昨兒賴大娘送我的那個大魚取來。] [再把那個大螃蟹拿來罷。] 只見這美人做的十分精緻。心中歡喜，便命叫放起來。寶琴也命人將自己的一個大蝙蝠也取來。寶釵也取了一個來，卻是一個七個大雁的，一時丫鬟們又拿了許多各式各樣的送飯的來，玩了一回。見天上也有一個鳳凰，[這也不知是誰家的。] [看他倒像要來絞的樣兒。] [又見一個門扇大的鈴瓏喜字帶響鞭，在半天如鍾鳴一般，也逼近來。] 眾人笑道：「這一個也來絞了。讓他三個絞在一處倒有趣呢。」說著，那喜字果然與這兩個鳳凰絞在一處。三個齊收亂頓，誰知線都斷了，那三個風箏飄飄搖搖都去了。眾人拍手哄然一笑，說「倒有趣……」

2-2. 再び『南鷄北鶩考工志』について

3. 食物としての鳥

3-1. 紅樓夢の鳥料理

① 燕窩

第45回 每日早起拿上等燕窩一兩，冰糖五錢，用銀銚子熬出粥來，若喫慣了，比藥還強，最是滋陰補氣的。

② ハトの卵

第40回 這裡的雞兒也俊，下的這蛋也小巧，怪俊的。一兩銀子，也沒聽見響聲兒就沒了。

③ 茄蕪

第41回 你把纔下來的茄子把皮剝了，只要淨肉，切成碎釘子，用雞油炸了，再用雞脯子肉并香菌，新筍，蘑菇，五香腐乾，各色乾果子，俱切成釘子，用雞湯煨了，將香油一收，外加糟油一拌，盛在瓷罐子裡封嚴，要喫時拿出來，用炒的雞瓜一拌就是。

④ 鴨と鵝

第62回 湘雲喫了酒，揀了一塊鴨肉呷口，忽見碗內有半個鴨頭，逐揀了出來喫腦子。眾人

催他：「別只顧喫，到底快說了。」湘雲使用箸子舉著說道：「這鴨頭不是那丫頭，頭上那討桂花油。」眾人越發笑起來，引的晴雯，小螺，鶯兒等一幹人都走過來說……

⑤ 鷄卵事件

第61回 你少滿嘴裡混噁！ 通共留下這幾個，預備菜上的澆頭。姑娘們不要，還不肯做上去呢，預備接急的。你們喫了，倘或一聲要起來，沒有好的，連雞蛋都沒了。你們深宅大院，水來伸手，飯來張口，只知雞蛋是平常物件，那里知道外頭買賣的行市呢。別說這個，有一年連草根子還沒了的日子還有呢。我勸他們，細米白飯，每日肥雞大鴨子，將就些兒也罷了。我倒別伺候頭層主子，只預備你們二層主子了。

⑥ 鳥料理と畜獸料理

第8回 寶玉因夸前日在那府裡珍大嫂子的好鵝掌鴨信。薛姨媽聽了，忙也把自己糟的取了些來與他嚐。

第50回 問那個盤子裡是甚么東西。眾人忙捧了過來，回說是糟鵪鶉。賈母道：「這倒罷了，撕一兩點腿子來。」

第62回 裡面是一碗蝦丸雞皮湯，又是一碗酒釀清蒸鴨子，一碟腌的胭脂鵝脯，寶玉聞著，倒覺比往常之味有勝些似的，撥了半碗飯，泡湯一喫，十分香甜可口。

第75回 這一碗是雞髓筍，是外頭老爺送上來的。

3-2. 「老蚌懷珠」について

君與芹圃交厚有年，亦知其擅南味否？以南酒少許環澆之，頓時鮮味濃溢，魚身……左以脯筍，不復識其為魚矣。……更以箸輕敲魚腹，……則明珠，粲然在目，疑是雀卵。此為老蚌懷珠。……江南佳味……

4. 虚の鳥

4-1. 言葉

① 人名

② 諺

- 第11回 癩蛤蟆想天蛾肉喫
 第17・18回 鳩群鴉屬之中，豈意得征鳳鸞之瑞
 第30回 黃鷹抓住了鷓鴣的腳
 第61回 藏老鼠和老鴿去借糧

③ 比喻

- 第3回 鼻膩鵝脂
 第3回 鴨蛋臉面
 第3回 一雙丹鳳三角眼
 第8回 只見大如雀卵
 第14回 揮霍指示
 第21回 雞聲鶉斗
 第21回 只望著平兒殺雞抹脖使顏色兒
 第28回 原來是個呆雁
 第29回 烏壓壓的占了一街的車
 第30回 昨兒為甚么又成了烏眼雞呢
 第46回 鴨蛋臉面，烏油頭髮，//兩邊腮上微微的幾點雀斑
 第49回 只見烏壓壓一地的人
 第58回 就如倦鳥出籠，每日園中遊戲
 第61回 兩眼就像那鷺雞似的
 第69回 好個愛八哥兒
 第75回 一個個不像烏眼雞
 第78回 一幹流賊餘党復又烏合
 第101回 他們各自家裡還烏眼雞似的

④ 詩語

- 第1回 釵於櫝內待時飛
 第5回 鳥驚庭樹
 第5回 若飛若揚
 第5回 鳳翥龍翔
 第5回 繡帳鴛衾
 第5回 飛鳥各投林
 第5回 好似食盡鳥投林

- 第11回 初罷鶯啼
 第17・18回 李太白〔鳳凰台〕之作，全套〔黃鶴樓〕
 第17・18回 蕉鶴
 第17・18回 有鳳來儀
 第17・18回 菱荇鵝兒水，桑榆燕子梁
 第22回 曉籌不用雞人報
 第25回 綺櫳晝夜晒鴛鴦
 第26回 只見鳳尾森森
 第26回 落花滿地鳥驚飛
 第27回 燕妒鶯慚
 第27回 花魂鳥魂總難留，鳥自無言花自羞……
 第28回 雞聲茅店月
 第28回 剔銀燈同入鴛帷悄
 第40回 御園卻被鳥銜出
 第62回 落霞於孤鶩齊飛，風急江天過雁哀
 第78回 鳩鳩惡其高，鷹鷂翻遭學覆
 第120回 聊倩鳥呼歸去

⑤ 实景

- 第3回 朝陽五鳳掛珠鉞
 第5回 又畫著兩人放風箏
 第15回 鶻鴿香念珠
 第16回 鶻鴿香串
 第17・18回 或山水人物，或翎毛花卉
 第17・18回 帳舞蟠龍
 第17・18回 鳳翼
 第17・18回 七鳳
 第17・18回 池中荷荇鳧鷖之屬
 第17・18回 屏列雉尾
 第49回 原來是孔雀毛織的。//那里是孔雀毛，就是野鴨子頭上的毛作的
 第52回 這叫作〔雀金呢〕，這是俄囉斯國拿孔雀毛拈了線織的
 第66回 囊中尚有一把鴛鴦劍

⑥ その他

- 第5回 有一隻雌鳳……凡鳥偏從末世來
 第36回 送到那鴉雀不到的幽僻之處
 第46回 說謊的是那架上的鸚哥
 第91回 莫向春風舞鷓鴣

4 - 2. 服裝飾

① 鵲鵲香念珠

第15回 鵲鵲香念珠

第16回 鵲鵲香串

② 雀金呢など

第49回 原來是孔雀毛織的。///那里是孔雀毛,

就是野鴨子頭上的毛作的

第52回 這叫作 [雀金呢], 這是俄囉斯國拿孔雀毛拈了線織的

③ 鴛鴦劍

第66回 囊中尚有一把鴛鴦劍